The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜紹介＞尾崎　翠著・訳／石原　深予編　『枯草のクッションを敷いた古馬車　尾崎翠全集未収録作品ほか』
Author(s)	鄧, 羚
Citation	語文. 2024, 123, p. 46
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/100246
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

尾崎　翠著・訳／石原　深予編
『枯草のクッションを敷いた古馬車
尾崎翠全集未収録作品ほか』

鄧　　羚

石原深予氏を編者に『枯草のクッションを敷いた古馬車　尾崎翠全集未収録作品ほか』（幻戯書房）が出版された。本書は、一九九八年に刊行された『定本尾崎翠全集』（筑摩書房）以降、加藤仁氏に発見された小説「書簡集の一部分」＝〈小野町子もの〉をはじめ、多くの尾崎研究者や関係者によって新たに発見された小説（第Ⅰ部）、エッセイ・評論・拾遺（第Ⅱ部）、初期詩作（第Ⅳ部）、初期歌作（第Ⅴ部）、メッセージ（第Ⅵ部）を初めて収録したものだ。映画漫想（第Ⅲ部）、帰郷後随想（第Ⅶ部）と併せ、豊富な資料と丁寧な解説を添えた本書によって、尾崎の業績と生涯を辿りながら、これまで不明だった尾崎の動向や作品の発表経緯に触れることができる。

近年、作家自身の生涯の映画化、全集未収録作品や同時代評の発掘が進む中で、尾崎翠は改めて注目され再評価されつつある。尾崎は、昭和六（一九三一）年二月・三月に『文学党員』に前編・中編、六月に『新興芸術研究』に全編を通して代表作「第七官界彷徨」を発表し好評を得た。しかし、翌年の昭和七（一九三二）年夏に幻覚症状のため鳥取に帰郷して静養、地元の雑誌にわずかな作品を発表した後、「黄金の沈黙」（尾崎翠「大田洋子と私」、本書第Ⅶ部「帰郷後随想」に収録）に閉じこもる。従来、帰郷療養後の著作として確認されていたのは随筆、評論と詩のみで、昭和八（一九三三）年二月八日、九日の「都新聞」に掲載された小説「書簡集の一部分」（本書第Ⅰ部に収録）は、この帰郷療養後の時期に発表された著作のうち、初めて発見された小説であり、知られざる尾崎の軌跡の空白を埋める貴重な作品である。

また石原氏らによって発見された初期詩作（第Ⅳ部）と初期歌作（第Ⅴ部）の大半は、これまで存在が知られてこなかったものである。それらは、尾崎が大岩尋常小学校で代用教員を勤めていた時期や初めて上京した時の作品であり、尾崎文学の出発点を知る上で極めて重要である。その他、長谷川時雨が創刊した『女人芸術』に昭和五（一九三〇）年四月から九月にかけて連載された「映画漫想（一～六）」（第Ⅲ部）など、全集には収録されているものの、文庫には未収録で読者に届きにくい作品や、鳥取県立図書館蔵の初公開となる写真資料も本書では紹介されている。

従来の解説の誤りを訂正する、石原氏による詳細な解題、平成一〇（一九九八）年以降に確認された作品や同時代評を補足した最新版年譜も収録されている本書は、尾崎翠研究にとって待望とも言える必須の一冊だ。

（幻戯書房出版、二〇二四年六月、三七九頁、四、八〇〇円＋税）

（とう・りょう　本学大学院博士後期課程）